特撮怪獣ブームがもたらしたものは
―誰もが主役の成長譚を求めて

静岡大学名誉教授
馬居政幸（うまい まさゆき）

Ⅰ ウルトラQの衝撃

一九六六年一月二日、日曜一九時から一九時半の枠に、円谷特技プロダクションによる「ウルトラQ」のテレビ放送が始まった。怪獣ブームの起点とされる特撮ドラマである。第一話から第五話までの視聴率を放映日・主役の怪獣名とともに紹介しよう。

一月　二日　古代怪獣ゴメス・原始怪鳥リトラ　三二・二%
　　九日　巨猿ゴロー　二二・四%
　一六日　火星怪獣ナメゴン　三四・二%
　二三日　古代植物ジュラン　三五・八%
　三〇日　冷凍怪獣ペギラ　三四・八%

三〇%を超す視聴率は、一月の五話だけでなく「ウルトラマン」にバトンタッチする直前の七月三日放送の「四次元怪獣トドラ」が活躍するまでの二七話中二三話で達成した。この数値は七月一〇日開始の「ウルトラマン」全三九話に引き継がれ、毎週三〇%台後半を維持し、四〇%を超える週もあった(1)。

視聴率の分母は世帯数。二年前の一九六四年に開催された東京オリンピックは日本中の茶の間でテレビを家族全員で視聴する生活習慣を広げた。日曜夜七時に三〇%以上とは、全国の三割以上の家庭の日曜夕食時に、毎週新たな怪獣の映像が届くことを示すのか？

その真偽とは別に、同時期に放送開始の「マグマ大使」や「サンダーバード」と競いながら、翌年開始の「ウルトラセブン」と合わせて、円谷プロの作品は、怪獣ブームの中核を形成することになる。後にこの時期を、子どもの世界の流行現象の観点から、第一次怪獣ブーム、四年後の七一年「仮面ライダー」に始まる変身ブームを第二次怪獣ブームと名付けることになる。

この二つのブームはテレビ業界での特撮やアニメの類似作品の制作・放送だけでなく、学年誌や週刊マンガ誌での掲載、主題歌や玩具・遊具・食品などの子どもを市場とする商品の開発・販売など、新たなビジネスモデルの誕生の観点から論じられてきた。同時にこの論点は、七三年オイルショックにより、多額の制作費が必要な特撮時代が終了し、発行部数を飛躍的に拡大するマンガ雑誌と連動したテレビアニメの時代に移行する社会的背景の理解に適用される。特撮番組を子ども向けの「ジャリ番」と格下にみる論の根拠にもなった。

だが私は、特撮番組の高視聴率を一時期の流行現象とみなすことに違和感を持つ。流行という社会現象は、後の社会の骨格を形成する力を持つ場合がある。ウルトラQに始まる特撮怪獣物語のテレビ放送はその代表例、と位置付けることから本稿の課題に応えたい。

Ⅱ 視聴率四〇%の視聴者を求めて

まず問うべきは四〇%という数値をもたらした視聴者の実像。その手掛かりはブームの社会的背景論に見られる二つの共通点にある。一つは「ジャリ番」との言葉が示唆する子どもを視聴者とみること。二つは最（人口コーホート）の観点から、一次は団塊の世代、二次は団塊ジュニアの子ども時代と重ねること。だが、ここでも私は違和感を持つ。一九四九年生まれの団塊の世代である私自身に、「ウルトラQ」をリアルタイムで視聴した記憶がないからである。東京オリンピックは中三、六六年は高二から高三になる年、作り物の怪獣にシュワッチと叫ぶ年齢ではない。ただし、六〇年代四国の小さな町の我が家のテレビに届くのはNHK二局と民放一局のみ。新聞のラジオ・テレビ番組面にウルトラの文字を見た記憶はない。だがこれはあくまで個人的な追憶にすぎない。

より正確な「ウルトラQ」と「ウルトラマン」のリアルタイム視聴者を求めて作成したのが次頁の図。最下段に出生数と率、その上に小中学校の在学者数の推移を図示した。最上位に高度成長期を中心に戦後日本

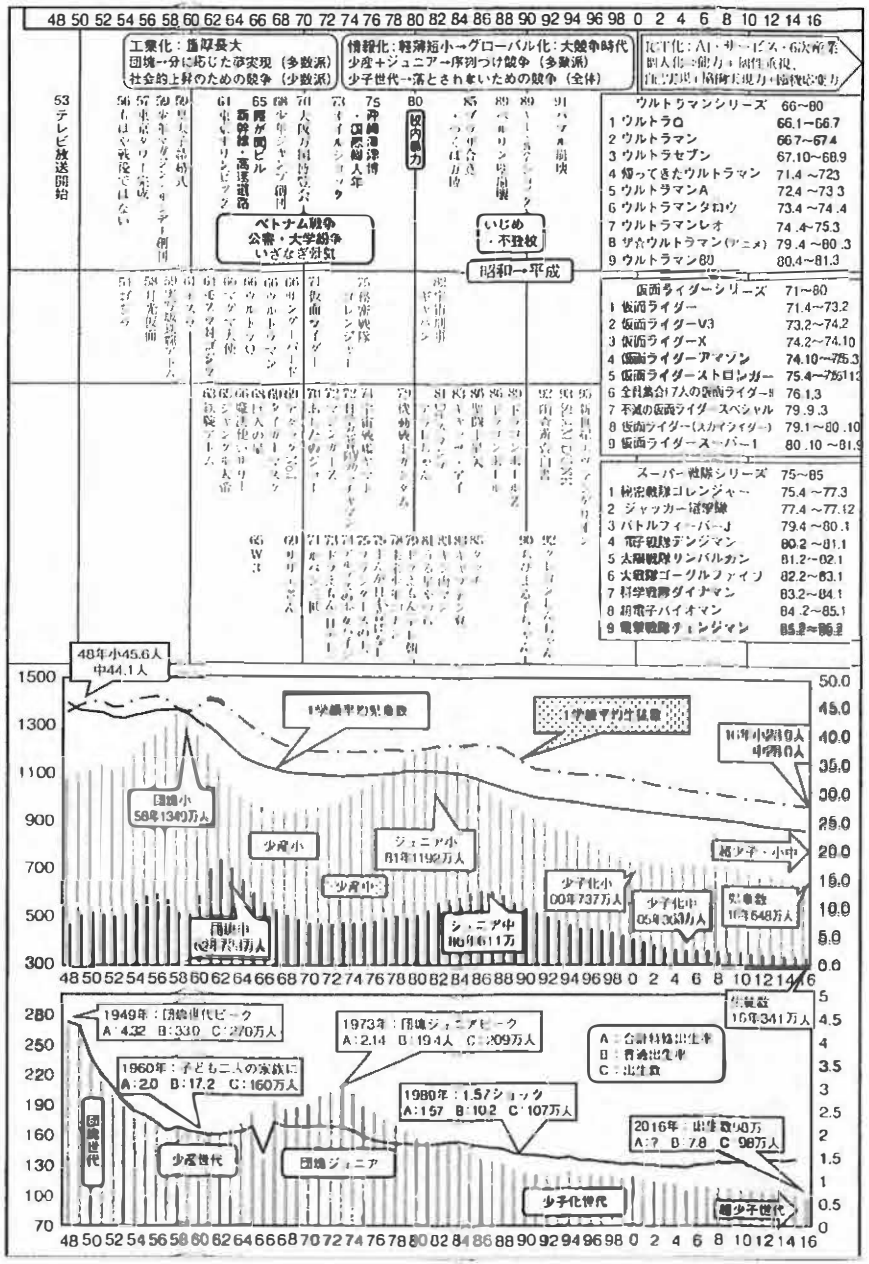

図1　出生数・率，小中学校在学者数と特撮・アニメ放映の推移

社会の変化を代表する社会事象を並べ、その下段に昭和期の主要な特撮とアニメの放映・放送開始年を上下に並置した。空白の平成期を活用して、ウルトラとライダーの各シリーズの開始年が八〇年まで、戦隊シリーズは八五年までを列記した。そして二つの図と年表との関係をわかりやすくするために、一九五〇年から一〇年単位に上下の補助線を引き、年号は西暦、年数の一九と二〇は略した。本文も原則同様である[2]。

まず団塊の世代との関係を確認しよう。四九年生まれの私が小三の五八年が、小学校在学者数のピーク一三四九万人。年表最上位社会事象史を見ると前年に東京タワー完成、翌年は皇太子結婚式と少年マガジン・サンデー創刊が並ぶ。その下段の特撮史では、五四年に五歳の私はゴジラに出会い、月光仮面は小三、モスラは小六だが、我が家にテレビが来たのは小五の夏、ゴジラとモスラは映画館だが月光仮面は電器屋さんの店先で立ち見。テレビジプシーといわれた時代である。

中学校在学者数のピークは六二年の七三三万人。四七年、四八年、四九年生まれの団塊の世代全員が中学生になる年だからだが、中学時代のリアル視聴はオリンピックまで。団塊の世代の特撮の記憶（ショックと感動）は映画館でのゴジラとモスラだが、いずれも円谷英二の世界。ウルトラシリーズへの親近感が学齢期に醸成され、その感情は自らの家族形成期に顕在化し、戦隊シリーズの親子視聴につながることを指摘しておく。

Ⅲ　特撮怪獣作品が創る世界とは

改めてリアル視聴の当事者を探そう。六六年ウルトラQから七一年仮面ライダー以前の一次ブーム期間と重なる児童数のグラフには「少産小」とある。ライダーから戦隊シリーズへの二次ブーム期間は生徒数の「少産中」が重なる。少産とは出生数図に示すように、団塊とジュニアという二つの人口の山の谷間にある世代の名称である。この出生数の谷は、現在の少子化と異なり、扶養人口の減少＝少産化による負担の軽減で経済発展を有利に進める「人口ボーナス」と国連が名付けた人口政策の結果である。日本は六〇年を前後する時期に、子ども二人の家族にすることで高度成長の社会基盤＝人的再生産システムを再構築した。それは全国から就職と進学のために都市に移動した若い男女の家族づくりの条件になり、サラリーマンの夫と専業主

婦の妻が二人の子どもを学校中心に育てる日本型近代家族が形成される。そのモデルが「ウルトラQ」や「ウルトラマン」の映像として全国の茶の間に届けられた。

台所は居間と繋がるキッチンに、食事はテーブルとイス、食後はソファーに座ってテレビを見ながら歓談。パパは眼鏡をかけてベージュのカーディガン、ママは淡いグリーンのワンピースに白いエプロン、兄は袖に赤いラインのカーディガン、妹は卵色のセーターにグリーンのスカート。壁には飾り棚とクーラーが並ぶ。

ウルトラセブン第七話「宇宙囚人303」の一シーンである。四〇%に達する視聴率は、幼児期から茶の間での視聴が可能になった少産世代だけでは不可能。チャンネル権を持つ父母や祖父母の世代の夢（興味関心・問題意識）に応える作品の質の高さで可能になった。憧れの家族セットの映像に、新たな人とその生きる場のあり方へのメッセージが込められていたからである。

Ⅳ 誰もが主役の成長譚に挑む

「我々が生きているこの世界は、自然界とのバランスによって支えられている。そして、調和とバランスの法則が、絶対に狂わないという前提を信じて、我々は安心してくらしている。しかし、科学的法則の絶対は、それが狂う確率が何万分の一、あるいは何億分の一かにすぎない。そして、もし、或る日、突然、何億分の一の可能性が現実のものとなり、奇妙な出来事が――。平和な日常生活の一角が、歪みを生じたとすれば……。」(3)

「ウルトラQ」を準備した「アンバランス」の企画書の一部である。執筆者は沖縄出身の金城哲夫。Qからセブンまでの脚本作成の中心者である。「ウルトラQ」は子ども番組ではなく、高度成長の負の要因への警鐘が企画の原点だった。怪獣ブームは、制作者の側からみれば、娯楽大作ではなく、社会派ドラマのストーリーと台詞で構成され、円谷英二のリアリティーに徹する特撮映像への拘りと重なって、世代を超える興奮と感動を呼び起こした。だが質の高さは製作費と時間とスタッフの力量で維持される。戦火への怒りと悲しみを秘めた作品制作の熱情に代わって、市場を拓くビジネスモデルへの専心が求められた。少産からジュニアへと市場の移動と拡大への要請は、商品の多様化と高度化を促進し、物語の合間の商品案内から商品案内の物語への変容と揶揄された。だがそれは、視聴率に代わって消費者の評価・選択が待つことを意味する。より高度な映像技術と子どもの好みの個別性に応ずる精密な物語の創造への道を拓いた。それは円谷や金城が描いた人と社会への警鐘を、新たな社会に生まれ育つ子どもたちの誰もが主役になる人生を歩むための資質・能力育成の成長譚を創りだす熱情の源泉に転換させる可能性と選択肢を秘めていた。その結果は、少子化による市場の縮小にもかかわらず、二種のシリーズが、今なお日曜午前、平日早朝の時間枠で表現され続けていることで確認できる。

誤解を恐れずに述べれば、戦隊シリーズは、日本のテレビ放送開始以来の最長寿番組「おかあさんといっしょ」が担ってきた幼児期の親子に良質なモデルを提供する保育・教育システムのサブシステムと評価したい。ママだけでなくパパも巻き込み、幼児期から学齢期まで視野におき、役割モデルとその実践化へのツールを毎週提供し続けているのがスーパー戦隊だからである。円谷と金城の警世の思いの継承と評価する理由でもある。

〔注記〕

(1) 視聴率はウルトラQがニールセン、ウルトマンがビデオリサーチ（ともに関東地区）。白石雅彦の(1)『ウルトラQ」の誕生』と(2)『ウルトラマン」の飛翔』（ともに双葉社）を参照。

(2) 出生数・率は人口動態統計、小中在学者数は学校基本調査。特撮・アニメは、本稿の考察も含めて、白石(1)(2)と(3)鈴木美潮『昭和特撮文化概論　ヒーローたちの戦いは報われたか』集英社　(4)氷川竜介『アニメ100年ハンドブック』ＩＲＤ工房に学ぶ。

(3) (5)由田輝子『ウルトラマンを創った男　金城哲夫の生涯』朝日新聞社　八九頁より引用。金城の足跡と評価も本書に学ぶ。

☆上記(1)～(5)に加えて以下の書を参考にした。

(6)円谷英明『ウルトラマンが泣いている』講談社　(7)コミック版世界の伝記22『円谷英二』ポプラ社　(8)『証言！ウルトラマン』講談社　(9)実相寺昭雄『ウルトラマン誕生』筑摩書房　(10)桜井浩子『ウルトラマン青春記』小学館　(11)『証言！仮面ライダー　昭和』講談社　(12)(13)津堅信之『日本のアニメは何がすごいのか』祥伝社、『新版アニメーション学入門』平凡社　(14)『学年誌ウルトラ伝説』小学館　(15)『ウルトラマン大図鑑デラックス』ポプラ社　(16)『仮面ライダー大図鑑』ポプラ社　(17)『スーパー戦隊大図鑑』ポプラ社　(18)浅尾典彦『アニメ・特撮・ＳＦ・映画メディア読本』青心社

児童心理
臨時増刊
2017年12月号

子ども問題の70年

CONTENTS

子どもにとっての戦後

002 子どもたちの八月一五日——戦時体制からの解放　上杉孝實
007 ラジオドラマ「鐘の鳴る丘」と戦災孤児——戦後の児童福祉の展開　高橋利一
013 新制中学校の誕生——六・三・三制の意味するもの　加野芳正
018 男女共学の実施——ジェンダーと教育　細辻恵子
023 街頭紙芝居にみる文化環境格差と戦後の子ども文化　加藤　理
029 集団就職列車での上京　遠藤由美
035 わが家にテレビがやってきた　深谷昌志

高度経済成長期の子どもたち

042 特撮怪獣ブームがもたらしたものは——誰もが主役の成長譚を求めて　馬居政幸
048 リカちゃん人形の世界——女の子たちに、もたらしたもの　土肥伊都子
054 過熱化する進学熱——学校教育の光と影　武内　清
059 少年週刊誌ブームの到来——「少年ジャンプ」がもたらしたもの　野上　暁
065 葬式ごっこの意味するもの——非社会的な問題行動への転換　小林正幸
071 「ゆとり教育」の功罪——早急に「学力低下」を言う前に　飯田浩之

平成時代の子どもたち

078 ファミコン・シンドロームの子どもたち　深谷昌志
083 「少年A」は何を示唆するか——少年法の規定をめぐって　石田文三
089 「学校恐怖症」から「不登校」へ——学校へ行けない子ども、行かない子ども　沢崎達夫
095 発達障害の増加?——特別支援の必要な子どもたち　市川宏伸
102 多国籍化する学校——多文化時代の子どもの対応　佐藤郡衛
107 小中一貫校の台頭——その課題を考える　有村久春
113 モンスター・ペアレントの「出現」——要求社会の中での学校対応　嶋崎政男

子どもたちの未来を考える

120 早期の集団保育環境での成長の是非
——女性の社会進出と保育ニーズ　中村徳子

126 「親性（おやせい）」の揺らぎと子ども虐待　深谷和子

131 スマホ世代の子どもたち——リアルとネットの融合の中での成長　藤川大祐

136 大学進学率五〇％時代の勉強——学歴神話の崩壊の中で　鈴木　聡

141 少子化社会の中での子どもの育ち——子育て支援の必要性　汐見稔幸

146 編集後記……深谷和子

イラスト・デザイン　岡田真理子